卒業論文

性的マイノリティ運動とゆらぎゆく当事者性

――Ally をめぐる語りから――

2018 年度入学
九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野
1LT18061M　宗像穂乃香
2022 年 1 月　提出

要約

2000 年代以降、日本においても性的マイノリティの抱える問題が顕在化しており、当事者の運動が盛んに行われつつある。このような運動には性的マイノリティの当事者本人だけではなく Ally（アライ）と呼ばれる立場の人々も参画している。Ally とは一般的に、非当事者だが当事者と同じように運動に取り組む理解者、支援者のように解釈されているが、その定義は統一的ではなく個々人に委ねられている。この Ally という概念は、比較的近年になって登場した新しい概念である。未だ議論の蓄積の少ないこの Ally という立場が、今現在の日本においてどのように解釈され、使用されているのかというのを明らかにしていくことが本研究の目的である。

まず第 1 章において、河口和也（2003）らの研究を元に性的マイノリティに関するこれまでの運動の歴史を概観した。歴史的に抑圧されてきた性的マイノリティを取り巻く環境は、19 世紀以降大きな変容を見せた。当初同性愛を主軸としていた運動は、やがて他のセクシュアリティを巻き込みながら拡大し、21 世紀に突入した現在においても権利獲得に向けて連綿とその活動を続けている。このような流れの中で、性的マイノリティの当事者でない人々も少しずつ運動に参画し、やがて Ally として認識されるようになってきた。これらの運動は主にアメリカにおいて急速に進んできており、日本では少し遅れた形で概念や言葉を輸入しながら運動が進んできた。

これらの歴史を踏まえた上で、第 2 章においては先行研究を参照し、これまでに当事者という立場がどのように考えられてきたかを整理した。上野千鶴子(2003)や草柳千早(2004)が指摘しているように、社会問題における当事者は、様々な過程をたどりながら当事者化していく。性的マイノリティの問題においても、森山至貴（2012）や鶴田幸恵(2008)の調査の例のように、言葉や定義づけによって絶えず当事者とそうでない人々がカテゴリー分けされる実践が見られた。今回主題にする Ally はその意味においては非当事者であるが、本郷正武（2007）の HIV 感染者の例や三部倫子（2014）、東由紀（2019）らの調査にも示されているように、当事者の外側の立ち位置から果たすことのできる役割が存在していることがわかった。これらをふまえて、実践の場において Ally という立場がどのように解釈され、そしてどのような役割を期待し/されているのかを、Ally 当事者や Ally を含む当事者団体の運営関係者へのインタビューを通して調査した。第 5 章においてその内容を簡潔にまとめ、それらをふまえた上で第 6 章において見えてきたものを整理した。

調査の結果、まず Ally 当事者の中に、自分が Ally であるということに対してゆらぎがあるということが見えてきた。性的マイノリティの運動を何れかのきっかけで自分事とし、活動に参画しながらも、性的マイノリティの中で本質的に性的マジョリティである自身が反対にマイノリティとなる経験を通して非当事者たる自分に直面し、葛藤を抱く過程が Ally 当事者の語りの中には共通して見られた。この一因として、運動の中で使われてきた Ally 概念が欧米からの輸入品であり、まだ日本においては十分に検討されておらず、その解釈が個々人に委ねられているということが挙げられる。Ally 当事者間、そして当事者団体の運営

関係者間でも Ally という立場への認識、解釈は異なっており、それが肯定的に使われる場合もあるが同時に、Ally 当事者の中のゆらぎにも繋がっていることがわかった。

当事者と非当事者の間でゆらぐ Ally という立場の姿が、本研究を通じて見えてきた。それと同時に、そのような立場であるからこそ果たしうる役割や期待されている役割もいくつか語りの中から発見することができた。今回の研究の中では性的マイノリティの問題の中に閉じて検討したが、この Ally という立場は他の社会問題においても生起しうるものである。今後は性的マイノリティの問題だけでなく様々な社会問題にまで広げて、非当事者であるが活動に参画していくという人々の姿を検討していかなければならないというのが残された課題である。

目次

1　はじめに……1
2　性的マイノリティ運動のこれまで……3
2.1　同性愛解放運動の始まり……3
2.2　運動の大きな転機……4
2.3　クィアの登場以降……5
3　先行研究の整理……7
3.1　当事者性をめぐる問い……7
3.1.1　福祉の視点からの「当事者」……7
3.1.2　曖昧な主体としての「当事者」……8
3.1.3　「当事者」に接近する非当事者……9
3.1.4　当事者コミュニティにおける「当事者」……10
3.2　Ally に期待される役割……12
3.3　新たな問い……14
4　調査の概要……16
4.1　調査手法……16
4.2　調査対象者……16
5　語りの中から……18
5.1　Ally 当事者へのインタビュー……18
5.1.1　当事者 A さんの語り……18
5.1.2　当事者 B さんの語り……20
5.1.3　当事者 C さんの語り……21
5.1.4　当事者 D さんの語り……23
5.1.5　当事者 E さんの語り……26
5.1.6　当事者 F さんの語り……27
5.2　当事者団体へのインタビュー……28
5.2.1　NPO 法人 ASTA 代表　松岡さん……28
5.2.2　FRENS 運営関係者　G さん……30
5.2.3　NPO 法人 ASTA 運営関係者　H さん……33
5.2.4　Allies Connect 代表　東さん……35
6　考察……38
6.1　Ally とは何か……38
6.2　Ally であることのゆらぎ……40
6.3　Ally であることの役割……42
7　おわりに……43

注 44
参考文献 45
付属資料：インタビュー記録 47